2014 年 11 月 9 日　多田義幸

『資本論』から学ぶ労働者像

はじめに

・日立アプライアンス（旧日立製作所　清水工場）にて、18 歳から 62 歳まで勤務。

・私の問題意識＝マルクスは「資本論」の中で、労働者をどのように描いたのか？

資本に支配された労働者は、いかにして人間になれるのか？

1.「価値形態論」から学んだこと

「人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて人間としての自分自身に関係するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、**パウロの全体**が、そのパウロ的な肉体のままで、**人間という種族の現象形態**として認められるのである。」（第 1 章　商品　P71）

「たとえば、この人が王であるのは、ただ、他の人々が彼にたいして、**臣下としてふるまう**からでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである。」（第 1 章　商品　P78）

…エピソード①（1969 年・18 歳）権力の道具になることへの苦痛

・新入社員の教育として、ストップウォッチを持って、現場の作業者の前で、作業時間とそのスピードを測定させられた。

・40 代の職場のリーダーから「今の作業スピードは、みんな緊張していて普通より速いから、これを標準にしないでくれ」と拝まれた。

・ストップウォッチを持った私は、その全体が権力の道具として彼らに映っていた。

●序列による差別意識ではなく、対等な人間としての意識をもつためには、そのようにふるまわなければならない。

2.「労働過程と価値増殖過程」から学んだこと

「労働過程は、**使用価値をつくるための合目的的活動**であり、人間の欲望を満足させるための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永久的な自然条件であり、したがって、この生活のどの形態にもかかわりなく、むしろ人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである。」（第 5 章　労働過程と価値増殖過程　P241）

「われわれが生産過程を価値増殖過程の観点から考察するやいなや、そうではなくなった。生産手段はたちまち他人の労働を吸収するための手段に転化した。労働者が生産手段を使うのではなく、生産手段が労働者を使うのである。」（第 9 章　剰余価値率と剰余価値量　P408）

…エピソード②（1972 年・21 歳）仕事への罪悪感

・設計の輸出係という所で仕事をしていたとき、日本の経済侵略反対ということで、日本の家電品が東南アジアの街角に積まれ、火をつけて燃やされている場面がテレビで映されていた。

・働く意味がわからなくなり、仕事が手につかなくなっていた。

●会社の労働には二重性がある。一面では、労働過程の中に働く意味を求め、他面では、もうけのために人を抑圧することに対して、たたかわなければならない。

3.「労働日」から学んだこと

「ジュネーブの「国際労働者大会」（第一インターナショナルの大会）は、ロンドンの総務委員会の提案にもとづいて、次のように決議した。「われわれは労働日の制限を、それなしには他の**いっさいの解放への努力が挫折**するよりほかはない一つの予備条件として宣言する。」」（第 8 章　労働日　P306）

「彼らを彼ら自身の**時間の主人**とすることによって、（諸種の工場法は）ある**精神的なエネルギー**を彼らに与え、このエネルギーは、ついには彼らが政治的権力を握ることになるように彼らを導いている。」（工場監督官報告書）（第 8 章　労働日　P398）

…エピソード③（1973 年・22 歳）残業しない生き方

・21 歳のとき、毎月 60 時間程度の残業をしていが、無意味なことだと思った。

・22 歳になったときに、残業しないことを自分の生き方として選択した。

・就業時間を知らせるチャイムは、階級闘争の産物であり、労働者が命を削って獲得したものである。

●資本のための時間から、自分のための時間を獲得する毎日のたたかいによって、時間の主人になることができる。

4.「絶対的剰余価値の生産」から学んだこと

「死んでいる労働と生きている労働との、価値と価値創造力との**関係の逆転**は、資本家の意識にどのように反映するか。」（第 9 章　剰余価値率と剰余価値量　P408）

「利潤率をつうじての移行によって剰余価値が利潤という形態に転化させられる仕方は、すでに生産過程で起きている**主体と客体との転倒**がいっそう発展したものであるにすぎない。すでに生産過程でわれわれは労働のすべての主体的な生産力が資本の生産力として現れるのを見た。一方では価値が、すなわち生きている労働を支配する過去の労働が、資本家において人格化される。他方では、逆に、労働者が、単に対象的な労働力として、商品として、現われる。」（第 3 巻第 2 章　利潤率　P56）

…エピソード④（1975 年・24 歳）出向延長の拒否

・オイルショックの後、200 人程度の労働者が、全国のサービス店や工事店に出向に出される。

・私も広島へ 9 ヶ月間行き、その後、会社からさらに 1 年間の出向延長が申し入れられるが、「契約違反だ」と拒否した。

・承諾がないまま、闘う決意で清水に帰って来たが、大勢いた活動家は会社の嫌がらせでほとんど退職していた。

●自分の意思を押し通すことが、物（資本の客体）ではなく、人間であることを確認する道だと思ったが、簡単に主体になれるわけではなかった。

5.「貨幣の資本への転化」から学んだこと

「彼の蝶への成長は、流通部面のなかで行われなければならないし、また流通部面で行われてはならない。これが問題の条件である。ここがロドスだ、さあ跳んでみろ！」第 4 章　貨幣の資本への転化　P218

…エピソード⑤（1992 年・41 歳）反共主義的労務管理と門前ビラの配布

・日立の職場にはスパイ組織が作られており、活動家等の行動は勤労課に報告されており、一般の労働者から分断され、管理されている状態だった。

・私は職場の労働者との人間関係を切り離し、地域で運動するスタイルを続けた。

・92 年、争議支援と職場の労働組合運動強化のための全国組織として日立関連労働者懇談会が結成され、毎月全国ビラを門前配布することになった。

・静岡県評がリストラに反対する運動として、日立で門前宣伝を行うことになり、この機会に門前ビラ配布にデビューすることにした。

（清水工場での門前ビラ配布）

●資本の客体としての労働者から、公然とした闘いによって現実的主体となる。工場の前で跳ぶことが、主体となるための条件だと思った。

6.「相対的剰余価値の生産」から学んだこと

「大工業は、変転する資本の搾取欲求のために予備として保有され自由に利用されるみじめな労働者人口という奇怪事の代わりに、変転する労働要求のための人間の絶対的な利用可能性をもってくることを、すなわち、一つの社会的細部機能の担い手でしかない部分個人の代わりに、いろいろな社会的機能を、自分のいろいろな活動様式としてかわるがわる行なうような**全体的に発達した個人**をもってくることを、一つの生死の問題にする。」（第 13 章　機械と大工業　P634）

…エピソード⑥（1999 年・48 歳）分社化による転属拒否

・1999 年からの 5 年間に、日立は全国で 13 工場、連結の人員で 10 万人が対象となる大規模な分社化を行い、最初に分社化されたのが清水工場だった。

・4 月に新会社が設立され、ほぼ全員が出向となり、3 ヵ月後の 7 月には全員が転属することになった。

・私は出向には応じたが、転属は会社からの説明不十分ということで拒否して、1 年後に転属した。

・報復行為としてソフトウエアの試験の仕事に配置転換された。20 代・30 代が中心の職場に、50 代の私は特異な存在だった。

●新しい仕事に順応する努力をすることが、発達した個人になるための道と考えていた。

7.「資本主義的蓄積の一般的法則」から学んだこと

「彼らが労働組合などによって**就業者と失業者との計画的協力を組織**して、かの資本主義的生産の自然法則が彼らの階級に与える破滅的な結果を克服または緩和しようとするやいなや、資本とその追従者である経済学者とは、「永遠な」いわば「神聖な」需要供給の法則の侵害について叫びたてるのである。」（第 23 章　資本主義的蓄積の一般的法則　Ｐ834）

…エピソード⑦（2004 年・53 歳）成果主義による賃下げ拒否

・成果主義賃金の導入で、格付けが最低の私の賃金は月 8 万円のマイナスとなる予定だった。
・賃下げに同意できないとして、日立の労働組合に苦情処理を申し入れたが却下された。
・静岡県評、静岡地区労連、全国の日立懇の共同した運動により、門前宣伝と会社への要請行動を行った。
・結果的に、日立製作所と同様に、定年までの補償を勝ち取り、同じように賃下げが予定されていた約 200 人の労働者も補償されることになった。

（静岡地区労連との共同行動）

●労働者の状態悪化に対し、資本の内と外での社会的連帯による運動が、資本を規制していく力となり、労働者を変革主体にさせる。

おわりに

・私が「資本論」から個人的に学んだこと。

	資本に支配された労働者から	人間になるための条件とは？
1	序列による差別意識	対等な人間としての意識を持つ
2	儲けのための労働	合目的的活動としての労働に、働く意味を求める
3	資本のための時間	自分のための時間を確保し、時間の主人となる
4	資本の客体としての労働者	公然とした闘いによって主体としての人間になる
5	部分個人	新しい労働に順応する全面的に発達した個人となる
6	労働者の状態悪化	社会的連帯により資本の規制を行う変革主体となる

・夕方、工場門前でビラ配布するために、半日年休で昼に工場の門を出る時、再びここに戻ってきてビラまきをするという気持が、資本に支配された労働者から、人間になるという解放感をもたらした。

（「資本論」からの引用は、大月書店、マルクス＝エンゲルス全集実行委員会訳、第 20 刷）

以上